

霊 聲

れ い せ い

2007年10月 (第171号)

北米ホーリネス教団
OMS Holiness Church of North America
www.omsholiness.org
reisei@omsholiness.org

御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。(コリント第一 2:13)

〓 牧会五〇年を経て

荒地を耕せ

鈴木 栄一

(引退牧師)

「汝らの新田を耕せ。茨の中に播
くなかれ。」(エレミヤ四章二節)

日本人への福音の伝達(コミュニ
ケーション)ということにつ
いて考えてみたい。そもそもコミュ
ニケーションとは、本来どのよう
にして成り立つものであるのか？

大分以前になるが、丁度、日米
貿易摩擦が深刻な問題となってい
たころ、アメリカの大学で日本文
化論を講じていた我妻洋氏が『日
本人とアメリカ人、ここが大違い』
という本を出版された。その副題
には、「貿易摩擦の底にひそむ誤解
と偏見」とあり、著者はその序文
で、「貿易とは物を売ったり買っ
たりすることだから、・・・そこには、



かならず文化の違う人間同士の接
触がある。・・・貿易摩擦というと金
や物の摩擦のように思う人がある
かも知れないが、実はそうではな
い。その摩擦の根底には人間関係
の摩擦があり、心の摩擦がある。

では心の摩擦はどうやって避け
ればよいのか。アメリカに限らず、
相手国の文化を十分に理解し、あ
わせて、われわれ日本人の行動を
規定している日本の文化を相手に
も十分理解させることが唯一の方
法である。異文化の理解というも
のは、実は不可能に近いほどの至
難事である。したがって異文化の
理解を前提とする異文化間コミュ
ニケーションも、不可能と思って

取り組んだら良いほどの容易なら
ぬ課題である。」と述べている。(傍
線筆者)

グローバルな時代を迎えた今、
ビジネスの世界でも自分とまった
く異なった価値観を持つ者同士が
渡り合おうとする時、こちらがど
れだけ相手の世界に精通してい
かが成功の鍵を握ることにつな
り、また相手にこちらの考えを「理
解」させることが出来さえしたら、
必然的に素晴らしい結果が伴っ
てくる。ゆえに我妻氏は異文化間コ
ミュニケーションの大切さ、と同
時にその至難さを指摘し、「不可
能」と思っ取り組んだら良いほど
の容易ならぬ課題」だとわれわれに
リマインドしているのである。

振り返って日本人伝道の問題に
ついて考えてみよう。プロテスタ
ントの日本伝道が開始されてから
でさえ一五〇年にもなろうとして
いながら、未だに総人口の一パー
セントにも満たないという日本の
クリスチャン人口の現実、日本
人伝道の困難さを如実に物語っ
ていると言えよう。だがその不振の
原因を、ただに日本の教会やクリ
スチャンたちの伝道に対する不熱

心や不信仰といったことに求めようとすると、問題の本質を大きく見落とすことになるであろう。

日本人伝道、すなわち日本人への福音の伝達は、根本的にこの「異文化間コミュニケーション」そのものである。確かに世俗化の道を突き進んでいるとはいえ、根本的にはキリスト教文化をその土台として成り立つアメリカ社会における伝道と、九九パーセントが異教徒であり、聖書の世界観とは完全に相反する人間中心の世界観に立ち、その人間を神として崇める偶像礼拝文化の中に生き続ける日本人への福音伝達とは、当然、その伝達の仕方においても根本的な違いがなければならぬ。話せば分かってもらえる世界でのやり方を、話しても分かってもらえない世界にそのまま持ち込んでも、役に立たないのはあまりにも当然のことと言えるのだ。

有効的なコミュニケーションとは、こちらがまず相手の立場に下りていって、相手を自分と結び付けようとする努力から生まれてくるものだ。自分の世界に閉じこもっていて、いくら雄弁に自己主張

を繰り返しても、異なった土俵に生きる人には何も伝わらないばかりか、下手をすれば誤解させることにもなる。

相手の立場に下りることは、まず相手をよく知ろうとすることから始まる。福音伝道において大切なのは、伝える相手（日本人）を研究しなければならぬということである。日本人とは一体「誰」なのかを知ろうとすることだ。日本人という特殊な文化人の思想と行動の規範となる世界観及びその価値観を見極め、それを聖書の光にあてて、コミュニケーションの橋をかける努力をしなければならぬのだ。

ここでわれわれは、これまで伝道、伝道と、やたら叫んでやってきたそのやり方について、もう一度再吟味してみることが急務だと思わせられる。いくらキリスト教先進国のやり方を真似してみても、自分が伝えようとする相手のことを考えようとする伝道の仕方は、結局のところ猿真似の一人芝居に終わるだけなのである。訳も分からずただ同じことをがなり立てる前に、一体、自分は「誰に」

向かって、また「何」を伝えようとしているのかを真剣に考えてみなければならないのだ。この意味で、今の日本に、このことと真剣に取り組む神学校が果たしてあるのだろうかと考えさせられる。

昔から日本人にとって、キリスト教は自分たちとは無関係の外国の宗教であり続けてきた。今なお多くの一般人のキリスト教に対する無関心は、このことを良く示している。彼らにとつて福音は必要なものではなく、毒にも薬にもならぬ、無意味なものに過ぎないのである。

主イエスの種蒔きの譬えは福音（種）を聞く人間の心の姿を巧みに映し出しているが、それによれば、道端、薄地、茨の地と「良い地」の最大の違いは、収穫のために畑が十分に耕されていたことにある。生まれつきのままなる日本人の心はキリスト教に対する偏見に踏み固められ、明治維新以来、表面的には近代化への道をたどりつつも、その根底には、依然として「日本教」などと呼ばれる日本的絶対主義がでんと腰を据え、日常生活においては、常に現世的世

俗快樂主義の茨に押し潰されているのである。

種蒔きの譬えの教えることは、良い地、耕された地に蒔かなければ、結局のところ、すべては無駄になるということではないだろうか。とするなら、日本人の心に福音の種を蒔くには、まず、広く、深く、入念に耕すことから始めなければならぬであろう。その偏見を取り除き、福音を受け入れやすくするために、伝道者は一体何をなすべきなのだろうか。

福音を受け入れさせるための耕しの働き、それはすべてのクリスチャンに与えられた使命であり、一人ひとりのクリスチャンが与えられた賜物を生かすことによつてなされる素晴らしい神の働きである。それは人間生活の、あらゆる分野においてなされなければならない。そのために賜物が与えられたのだ。お互い自分に与えられている賜物を確認し、日本人の心の畑を耕すために励もうではないか。

新任牧師の紹介

私をお遣わしてください

中尾善之介 (なかお よしのすけ)
(ウエストコビナ教会 牧師)

「第二次ベビーブーマー」「団塊ジュニア」とよばれた一九七三年生まれの私は、福岡県のクリスマスチャンホームに生まれ育ちました。

初めてアメリカの地を訪れたのは、一八歳の時、母教会の伝道旅行でした。

その時、見るものが全てが新鮮な旅の途中で、日系人教会の礼拝に出席させて頂きました。私にとっではじめての異国の地で、日系人の皆さんと共に、日本語で神さまを賛美した時の感動は、今でも忘れられません。私は、その伝道旅行を通して、献身へと導かれ、日

系人伝道への重荷を与えられました。

東京聖書学院に入学し、同じヴィジョンを持った家内と出会い、卒業後は、北九州の母教会で三年間牧師をしました。その後、CJMの宣教師として、カナダのアルバータ州にある、レスブリッジという日系カナダ人強制移住の地において、日系人開拓伝道をさせて頂きました。しかし、神さまから与えられた、「わたしが示す地へ行きなさい。」という御言葉にお従いし、もう一度、日系人伝道への重荷と共に、志を立てた地アメリカへの道を示されました。

現在、ウエストコビナキリスト教会で牧会をスタートしてから、あつという間に二年が経ちました。後ろも振り返らず、走り抜けたような二年ですが、こうして思い返すと、なんと言う神さまの摂理、神さまの恵みだろうか、これまででの全ての出逢いと導きに、感謝で一杯になります。

ロサンゼルスでの生活は、以前、同じ日系人伝道をしてきたカナダと比べて、時間の早さ、一日の長さが違うようにさえ感じる、忙

しい毎日です。

これには最初、とても抵抗がありました。しかし教会は、世界中どこであつても、変わらない同じ神さまが、いつも私たちを迎えて下さり、慰め、励まし、力づけてくださる所です。神さまに、教会に仕えながらも、自分自身が「教会」や「教団」から、この二年間に、どれだけ大きな励ましを頂いたことでしょうか。今年、八歳になった長女を筆頭に日本、カナダ、アメリカと、それぞれの国で与えられた三人の娘達と共に、家族でミニストリーをさせて頂いています。こんな私をも御用に立たせて下さった神さまは、この地に遣わされる時、

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行つて実を結び、そのあなたがたの実が残るためである。」(ヨハネ一五章一六節)を与えて下さいました。

教会は、建物や団体として存在していますが、人が救われるのは、その地にある魂を、愛してやまな

い神さまの御業です。その御業の為に用いていただく私たちに大切なのは、同じようにその地を愛し、魂を愛し、どれだけその魂の為に祈れるかではないかと、思わされています。私自身は、未熟で欠けだらけの者ですが、神さまは、天からこの地を見渡して、「わたしの為に立ち上がり、わたしの愛する魂の為に、共に祈り、手足となつてくれる者がいないか。」と、今日も語って下さいます。朝毎に「ここわたしがおります。わたしをお遣わし下さい。」とお応えする事のできる者でありたいと思います。



北米のリバイバルに貢献した人々

オレンジ郡教会牧師 杉村 宰

今回は一八八九年、サンフランシスコのメソジスト・ミッションで起こった大リバイバルに貢献した幾人かの人々をご紹介します。

その「リバイバルの仕掛け人」、河辺貞吉の手記だ。

「明治二三年七月、東ヶ崎菊松兄達とMCハリス博士が聖書の学びをしている時、東ヶ崎兄は自ら罪を示され一週間ばかり静かな所に退いて断食して祈った。その時、聖霊を受け、大いなる喜びに満たされた。そこで、この聖霊体験は自分も受けねばならないと示され、祈りと聖書を読むことに没頭した。神はその祈りに応えて内住



の罪を示した。それは耐えられないほどの苦しみであったが、明治二三年八月に言葉では表現できないほどの平和と喜びが与えられた。」

この聖霊体験は他の二五名の心を同じくする者たちの求めるところとなつて、ついに彼らはキリストの精鋭部隊となつていった。それはあかかも使徒行伝時代を思わせるものであったという。その火が次々と日本人青年の間に燃え広がり、三年間に四百人、二年後には更に千名の受洗者が与えられた。

その火はサンフランシスコのみならず、近隣のサンノゼ、オークランド、サクラメント、ワトソンビルにまで、さらには南加にまで広がった。これがメソジスト教会の発端となった。その第一人者は河辺貞吉であった。彼は西海岸を北上し、火の玉となって巡回伝道したのだった。彼はやがて日本に帰り、日本フリーメソジスト教会の堅固な基礎を据えたのだった。

さて、このハリス博士がこれら小

な群れの指導者であつた訳だが、彼は南北戦争のさいに義勇軍に参加している。最初、メソジスト教会から日本に宣教師として函館に遣わされ、北海道、東北地区の伝道責任者となり、一八七七年の「弘前メソジスト教会」設立に貢献している。そこは弘前出身で、日本ホーリネス教団監督の中田重治が育まれた所だ。その当時、札幌農学校には新渡戸稲造、内村鑑三らがいた。

「少年よ、大志を抱け」で有名なクラーク博士は札幌には八ヶ月しか居なかつたので、そこには霊的なリーダーが不在であつた。そこで函館の領事でもあつたハリスが彼らの支えとなり、明治十一年六月、他の八名とともに彼から洗礼を受けている。そのハリス博士が指導者となつて導いた聖書研究が北米日系人のリバイバルとなつたのだった。「アメリカ生まれの日本人」を自称していた人物で、宣教師としては最高の勲二等を受賞している。彼こそは日本とアメリカの架け橋であつた。

さて、その河辺らと一緒に北米で伝道活動した人物として笹尾鉄三郎、木田文治らがいる。笹尾は日本に帰つてからは中田重治を助け、東京聖書学院の院長となり、日本のきよめ派といわ

れたグループの草分けとなつたのである。彼は日本のキリスト教会の聖徒として、その右に出る者はいないと言われるほどの霊的逸材である。

笹尾と内村鑑三とは自宅が近かつた。内村の笹尾に対する信任は深く、内村の娘さんのルツ子さんが大病を患つた時、「この子の生きるのも死ぬのもあなたに任せるから、祈つてくれ」と頼まれたほどであつた。ちなみに英語に秀でた笹尾の下で、北米ホーリネス教団監督となつた葛原定市は修養生時代に彼から英語を学んでいる。

一方、木田は私たち「北米ホーリネス教会」を建ち上げている。彼が入信したのはリバイバルの最中の一八九二年で、伝道の召命を受けて翌年献身し、五年間、茨城県土浦のフレンド教会の牧師として働き、一九〇七年に再び渡米し、ホイテアアのフレンド派の教会で日本人伝道を始めたのだった。その最初の実が矢野はつ姉で、やがて八尋ジョージ先生と結ばれる。現在、ロサンゼルス教会英語部の向井ユース姉のご両親にあたる。

今日の私たちの教団の発芽は百二十年ほど前に興つたメソジスト教会のリバイバルにある。



聖霊に導かれて

上村 和男

(引退牧師)

日々の信仰生活の中で、聖霊に満たされる経験の少ない事を思い、何とかもつと積極的に聖霊を求めなければならぬことを痛感させられています。

聖霊というお方について、すでに私たちは、多くの事を聞き、あるいは学んで来ましたが、現実には満たされていない自分気づく時、どうすればよいのか戸惑いを覚えずにはいられません。そういった悩みに対して、どのように対処すれば良いのか、少し考えてみたいと思います。

私が気付かされたことは、聖霊という方がどのようなお方であるかをはっきりと把握しなければならぬということと、聖霊を受けられるためには自分がどのような信仰の状態にある事が、望ましいのかということ事です。

この事は、あまりにも膨大な課題になりますので、ごく一部を取り上げてみたいと思います。

新約聖書の使徒行伝は聖霊行伝とも言われ、第二章の聖霊降臨によって、それまでイエスの弟子「見習う者」であった者たちが、使徒「伝える者」として役目を果たすようになった事を記しています。また、昇天されたイエス・キリストの霊である聖霊は初めて人類のただ中に御臨在されるために降られたと言っています。しかも、聖書の中に聖霊が再び昇天されたという記事は見当たりません。二千年を経た現在もこの地上にご臨在くださっているのです。高い天から呼び下ろさなければならぬようなお方ではないわけでは

聖霊とはキリストの霊であり、真理の御霊であり、助け主であるヨハネ伝の著者は述べています。(ヨハネ一四章一六節〜一八節)「助け主」とは、そばに呼び出された者の意で「慰め主」または、「弁護士」とも訳されている言葉です。キリスト教信仰は、聖霊の助けなしには不可能なので

す。また、聖霊は私たちを真理へ導き、罪と義と裁きについて分からせてくださり、心の目を開き、主を認めさせてくださるお方なのです。これらの驚くべき事は、聖霊によってのみ可能であり、聖霊の内住によってのみ体験することができるとロマ書八章全体にパウロは説いているのです。

第二に、聖霊を受けるためには、どのような信仰的状态にある事が望ましいのかという事ですが、これは徹底した罪の悔い改めがどうしても必要なのです。この事を曖昧にしては聖霊経験は不可能でしょう。主は言われました「もし、私たちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義から私たちをきよめて下さる。」(ヨハネ第一の手紙一章九節)また、使徒行伝を見ますと聖霊の降臨は聞く事、祈る事、心を一つにして集まる事によってなされた事が分かります。これらの事が起こった時の状況をみますと、一つの共通点に気が付きます。

聖霊が降った、聖霊を受けた、

と書かれた箇所には必ず御霊に満たされていた伝道者、使徒の存在があったと言っても過言ではないでしょう。

ペテロやパウロの口から語られた聖言は、祈り手によって聖霊の伝達がなされていったことを見る事ができるのです。

「伝道は人なり」とホーリネス教団のある牧師先生が言われましたが、聖霊を伝達する牧者、クリスチャンが求められているように思われます。



教団ニュース

■二〇〇八年牧師リトリート
一月二八日(月)～三一日(木)

会場 Water Doloresa Retreat Center
オンラインにて登録できます、

■先の総会で選出された今年度の
常務委員、司法委員は次の通りで
す。

*常務委員

議長：中馬リック師

常務書記：藤岡二郎師(日本語)

山下ゲリー博士(英語)

教会開拓：ロバーツ・ジョー師

伝道：永井祥太郎兄

教育出版：島田直師

福祉：横溝ブライス兄

ペンション：中筋ポール師

教職任命：辻村ルース姉

ヴィジョン：高吉智恵子師

財務：知念ドリス姉

玉川フェイ姉

教理調査：佐藤ステイブ師

世界宣教：田淵メリー姉

*司法委員

安次富ケネス師、杉村宰師

中尾邦三師、東フランク兄

斉藤ウォルター兄

教会ニュース

■鈴木栄一牧師 八月をもって教
団教職を引退されました。リタ

イヤメント記念パーティーが八
月四日(土)、アラモアナホテル
にて盛大に開かれました。

■中島光成牧師 二〇〇七年教団
総会にてノースカウンティ教会
の牧師として任命され、働きを
始めておられます。

■アーバイン伝道所はこの九月で
二周年目を無事終え、三年目に
入ります。続いてお祈り下さい。

■オレンジ郡教会は九月二三日に
創立三〇周年記念礼拝をお祝い
致しました。これまでの主の豊
かな御導きを心から主に感謝い
たしております。

■サンタクララバレー教会では毎
年十月に、教会でサポートして
いる宣教師子弟にクリスマス・
プレゼントを送るため、「クリス
マス・イン・オクトーバー募金」
を集めており、今年もその呼び
かけが始まりました。

■ハワイでは、二〇〇七年十月一
九日～二一日、ハワイ・リバイ
バルミッションが開催されます。

★新刊情報

一〇ドル

「自分の足で立つ」鈴木栄一著

発行 プレイズ出版

購入を希望される方はホノル
ル教会までご連絡ください。

消 息

■上村和男牧師(引退牧師、ハワ
イ)現在、週三回の透析治療を
しています。お祈りください。

■山口光牧師家族は、無事にイス
ラエル、ヘブライ大学での学び
をスタートしました。学びと安
全、経済的必要性のためにお祈り
ください。

通信員募集

「教会ニュース」を『靈聲』に届
けていただく「通信員」を募集し
ています。各教会で通信員を選び、
氏名とEメール・アドレスを編集
室までお知らせください。

編集室から

▼最近、ひいきにしているラーメ
ン屋が、日本の本店と同じ麺が完
成できたと言って来た。さっそく
食べに行ったら本当に美味しかっ
た。今号の『靈聲』の味わいはい
かに？ 読めば読むほど味わいが
増して来るようだ。▼今号から、
印刷した霊声を各教会に送るよう
になった。少しでも読み易くなれ
ばと願っている。(真)

教団所属教会

(カリフォルニア)

フリーモント教会
サンロレンゾ教会
サンタクララバレー教会
ウォーナッツクリーク教会
ロサンゼルス教会
サンファンド教会
サウスベイ教会
ウエストコピナ教会
ウエストロサンゼルス教会

オレンジ郡教会
ホイットティア教会
サンディエゴ教会
ノースカウンティ教会
(ハワイ)

ホノルル教会
ウエストオアフ教会
ミリラニ教会
(アリゾナ)

ツーソン教会
(詳しくは www.omsholiness.org
を参照)